

副腎腫瘍と思われた有茎性肝細胞癌の1例

市立静岡病院泌尿器科

金丸 洋史・佐々木 美晴

市立静岡病院 内科

西村 治男・村上 隼夫

市立静岡病院 外科

梶原 建熙

京都大学医学部泌尿器科学教室

吉田 修

A CASE OF PEDUNCULATED HEPATOMA SUSPECTED
OF ADRENAL TUMOR

Hiroshi KANAMARU and Miharu SASAKI

From the Department of Urology, Shizuoka City Hospital

Haruo NISHIMURA and Hayao MURAKAMI

From the Department of Internal Medicine, Shizuoka City Hospital

Takchiro KAZIWARA

From the Department of Surgery, Shizuoka City Hospital

Osamu YOSHIDA

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

We herein report a case of pedunculated hepatoma which was preoperatively diagnosed as nonfunctioning adrenal tumor.

A 51-year-old man was admitted for further examination of right hypochondrial pain. CT scan showed a right suprarenal mass. Tumor vessels were visualized on selective right renal arteriography and right inferior phrenic arteriography. Adrenal function was normal.

Preoperative diagnosis was nonfunctioning right adrenal tumor.

On operation, we found a right suprarenal tumor which was in continuity with the inferior part of the liver.

Pathological diagnosis of the biopsy specimen was hepatocellular carcinoma (Edmondson's grade 3).

Difficulty of preoperative diagnosis of pedunculated hepatoma is discussed.

Key word: Pedunculated hepatoma

緒 言

肝細胞癌が主として肝外に有茎性発育した場合、診

断上困難を生じることがある。われわれは最近レ線上腺腎腫瘍を強く疑われ、術中肝細胞癌と判明した1例を経験したのでこれを報告する。

症 例

患者：51歳，男性，会社員

初診：1983年1月19日

主訴：右季肋部痛

家族歴：父・直腸癌

既応歴：1961年肺結核のため10カ月入院治療した。

1978年糖尿病のため3カ月入院治療した。1981年再び糖尿病のため3カ月入院しインシュリン注射を開始した。また、この時肝硬変と診断された。

現病歴：1983年1月7日右季肋部痛が出現したため他院を受診し腎腫瘍の疑いといわれた。このため1983年1月19日精査を希望して当院内科を受診し同日入院となった。

現症：体格中等度，栄養良好，眼球結膜に黄疸認めず。胸腹部に理学的所見上異常を認めず。

入院時一般検査：血沈1時間値16mm，2時間値42mm。血圧120/80mmHg。空腹時血糖213mg/dl。末梢血：赤血球 $328 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，白血球 $3900/\text{mm}^3$ ，血小板 $11.8 \times 10^4/\text{mm}^3$ ，色素素11.8g/dl，ヘマトクリット36.5%。血液生化学：クレアチニン1.1mg/dl，BUN11.0mg/dl，Na136mEq/l，K4.1mEq/l，P4.0mg/dl，Ca9.1mg/dl，GOT149KU，GPT88KU，LDH420WU，ALP8.8KAU，黄疸指数5，総コレステロール129mg/dl，総ビリルビン0.70mg/dl，TTT9.5KU，ZTT24.1KU，アマラーゼ186IU/l，LAP184IU/l。血清学的検査：HBs抗原(-)，HBs抗体(+)，CEA6.3ng/ml。尿所見：糖(卅)，蛋白(-)，ビリルビン(-)，ウロビリノーゲン(-)，沈渣 赤血球2~3/数視野，白血球1~2/数視野。

レ線学的検査：排泄性腎盂造影にて腎盂像に著変を認めないが，右腎の nephrogram に上方よりの圧排を疑わせる所見を認めた (Fig. 1)。右腎上極から肝にかけての CT では，右腎上方に造影剤にて enhance されない low density mass を認めた (Fig. 2)。血管造影では選択的右腎動脈造影および右下横隔膜動脈造影にて右腎上方に tumor stain を認めた (Fig. 3, 4)。胸部単純撮影では右上肺野に coin lesion を疑わせる所見を認めた。

内分泌学的検査：血清コルチゾール $9.6 \mu\text{g}/\text{dl}$ ，血漿アドレナリン $0.01 \text{ ng}/\text{ml}$ 以下，ノルアドレナリン

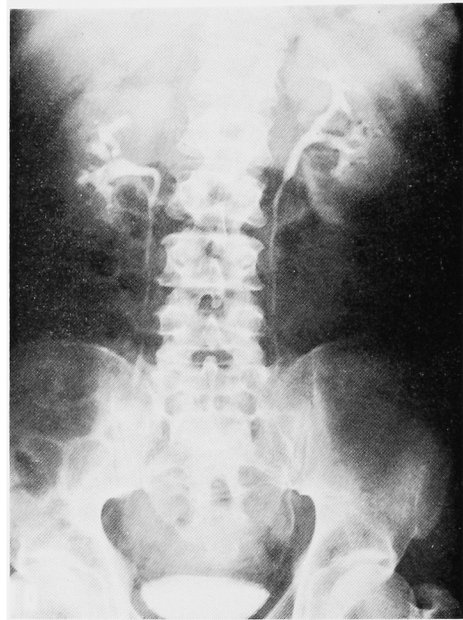


Fig. 1. DIP

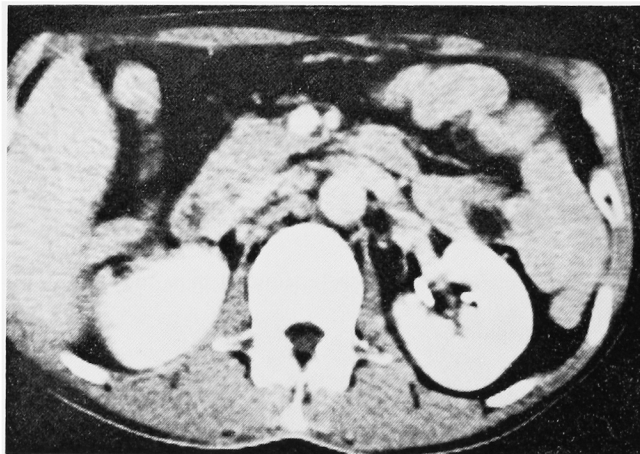


Fig. 2A. CT scan with contrast enhancement showing bilateral kidneys

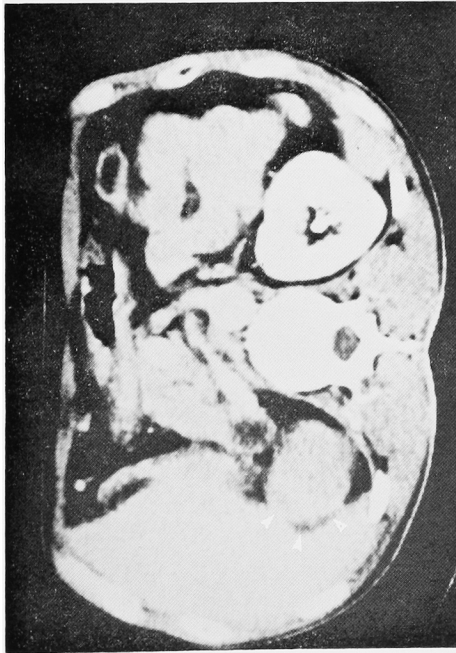


Fig. 2B. CT scan at 20 mm higher level than Fig. 2A showing low density mass which appears to be separated from the liver (arrows)



Fig. 2D. CT scan at 60 mm higher level than Fig. 2A showing normal liver parenchyma

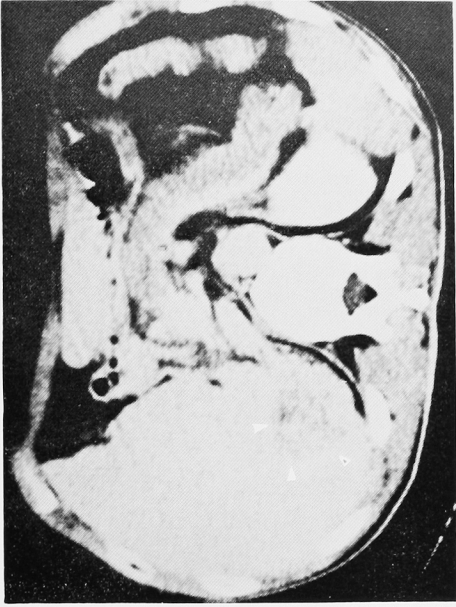


Fig. 2C. CT scan at 40 mm higher level than Fig. 2A showing low density area (arrows)

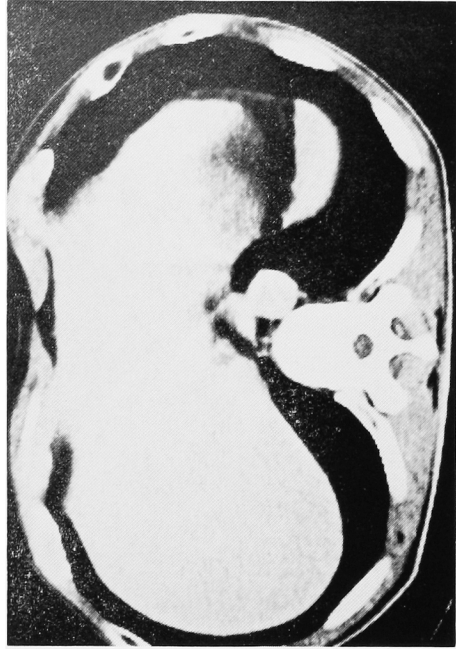


Fig. 2E. CT scan at 90 mm higher level than Fig. 2A showing normal liver parenchyma



Fig. 3. Selective right renal arteriography showing tumor vessels above the right kidney (arrows)

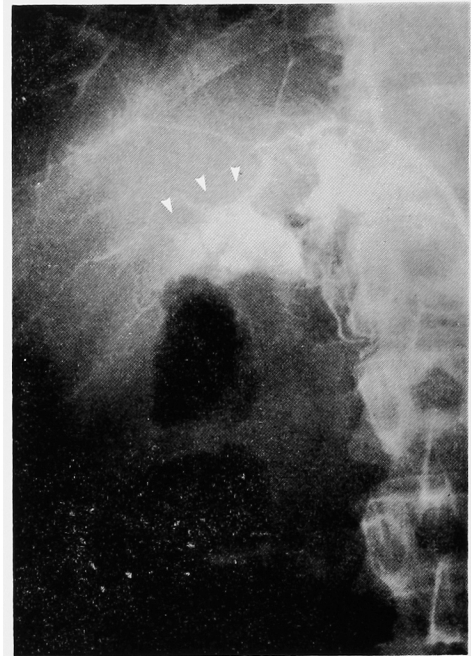


Fig. 4. Selective right inferior phrenic arteriography showing tumor stain (arrows)

0.15 ng/ml, アルドステロン 53.1 pg/ml, 尿中 17 KS 3.8 mg/日, 17 OHCS 3.8 mg/日, VMA 8.3 mg/日, メタネフリン 0.28 mg/日であり, 副腎機能に異常を認めなかった。

以上の所見より, 内分泌学的に非活性な右副腎腫瘍と診断し, 1983年2月25日当院泌尿器科にて右副腎摘除を目的として手術を施行した。

手術所見: 第12肋骨床より後腹膜腔に至ると, 右腎上方に超鶏卵大の腫瘍を認めた。腫瘍は右腎上極と容易にはく離可能であり, 続いて肝右葉下面と腫瘍のはく離を試みたところ, 肝下面と腫瘍とはあきらかに連続しており (Fig. 5), また, 腫瘍の内側に正常な外観の右副腎が認められた。肝は全体に固く, 表面に凹凸を認めた。

このため肝右葉下面より有茎性に発育した腫瘍と判断し, これを生検し一部を迅速病理検査へ提出した。その結果は肝細胞癌であったため, 腫瘍摘除を中止し一部の生検のみにとどめ手術を終了した。

病理診断: 肝細胞癌 (Edmondson's grade 3) (Fig. 6)。

術後患者の回復をまって腹腔動脈造影を施行した。肝右葉上部および腫瘍存在部に tumor stain と思われる所見を認めたが, 術前の右腎動脈造影および右下横隔膜動脈造影でみられたほど明瞭ではなかった (Fig.

7)。

また, 術後の血清αフェトプロテインは1,600ng/mlの高値を示した。

患者は1983年3月29日当院外科にて肝部分切除術を施行し, 術後53日目に退院した。

考 察

内分泌学的に非活性な副腎腫瘍が疑われる場合, その診断はレ線学的検査およびその他の画像診断が主であり, 隣接臓器から発生する腫瘍を除外する必要がある。本症例では既に肝硬変があり, 肝癌の可能性は十分考慮されるべきであったが, CT および血管造影の所見から副腎腫瘍が強く疑われ, 肝癌を予測することは困難であった。

本症例は主として肝外に有茎性に肝癌が発育したため, CT 像にて肝とは別個に腫瘍が存在するような印象を与えた (Fig. 2B)。また, 選択的右腎動脈造影および右下横隔膜動脈造影にて明瞭な腫瘍血管像が得られた点も興味深い。通常肝癌は肝動脈が栄養血管であり, 肝外性に肝癌が発育を示した過去の症例¹⁻¹⁵⁾でも肝動脈に支配された腫瘍血管像が得られたという報告が多い。しかし, 一部の症例では, 左・右胃動脈, 大網動脈, 中・右結腸動脈からの血管支配が認められている。さらに Charnsangavej ら¹⁶⁾によれば, 肝癌に



Fig. 5. Tumor (short arrow) is in continuity with the liver (long arrow). White arrow indicates the right kidney

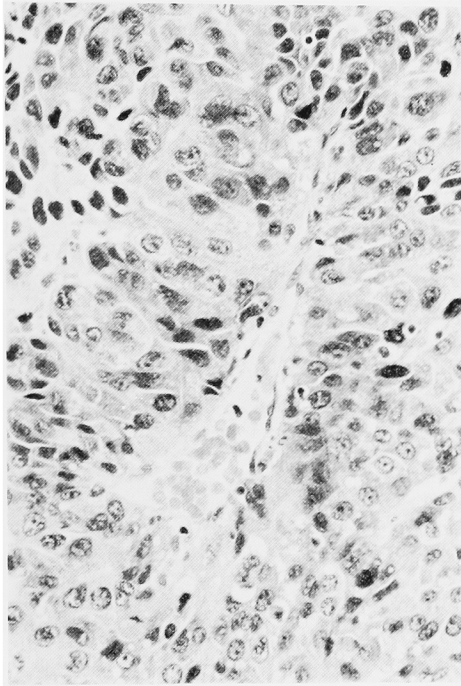


Fig. 6. Microscopic view of the biopsy specimen



Fig. 7A. Celiac arteriography, arterial phase



Fig. 7B. Venous phase. Arrows indicate tumor stains

対する肝動脈閉塞後の副側血行路の一部として、下横隔膜動脈・右腎動脈被膜枝が挙げられており、肝右葉下面に肝癌が発生した場合にこれらの動脈が栄養血管の一部となる可能性は十分考えられることである。

肝癌が主として肝外に発育する症例は比較的まれと思われ、本邦の文献上30数例の報告がみられるが、内分泌学的に非活性な副腎腫瘍と鑑別すべき疾患のひとつとして念頭に置く必要があると思われる。

結 語

レ線上副腎腫瘍が疑われ、術中肝外に有茎性に発育した肝癌と判明した1例を報告した。

参 考 文 献

- 1) 山村卓也・秋之敬一・市原荘六・三浦 健・多田祐輔・杉浦光雄・和田達雄：肝外性に発育し特異な血管支配を示したへパトーマの1例。日外会誌 **79**: 169, 1978
- 2) 岡田隆夫・太田茂樹・森田修身・白松幸爾・室谷光三：肝外発育を示した肝細胞癌の1例。日内会誌 **68**: 670~671, 1979
- 3) 中沢秀昭・松本信子・外山久太郎・高橋唯郎・柴田久雄・富田友幸・岡部治弥・箕浦宏彦・大宮東生・佐々木憲一：臨床的に肝外発育性 hepatoma と考えられた1例。肝臓 **20**: 765, 1979
- 4) 山崎芳生・富川伸二・佐々木秀俊・中村 卓・多田弘一・岡林義弘・竹内藤吉：肝外性に発育した肝細胞癌の1例。日外会誌 **81**: 178~179, 1980
- 5) 二宮冬彦・山口弦二郎・丸山直人・本告 仁・稲永国勝・長田英輔・久保保彦・谷川久一・荒川正博：肝外性発育を呈した肝細胞癌の1例。肝臓 **21**: 1019, 1980
- 6) 行徳 豊・杉原 甫・尼崎辰彦・森 巖・木下 勇：有茎性肝細胞癌の1例。癌の臨床 **26**: 92~96, 1980
- 7) 原口増穂・村上一生・藤岡利生・重岡健一郎・北島醇二・中村憲章・牧山和也・中口規彦・原 耕平：肝外発育型細胞癌の一例。日癌治 **15**: 168, 1980
- 8) 今岡真義・佐々木 洋・松井征雄・石川 治・谷口健三・岩永 剛・青木行俊・寺沢敏夫：有茎性肝細胞癌の3例。日消外会誌 **14**: 780, 1981
- 9) 是永建雄・三室 淳・池上文詔・沢崎博次・高橋康雄・多賀須幸男・蜂屋順一・石河利隆・吉村克俊：主として肝外性発育を示した巨大へパトーマ。通信医学 **33**: 471~475, 1981
- 10) 長浜真人・松本俊治・白田一誠・桑原紀之・福田芳郎・水口国雄・有山 婁：肝外に著明な発育を示した肝細胞癌の1例。日病理会誌 **70**: 310, 1981
- 11) 沢村隆也・橋本 徹・塩崎安子・鮫島美子・勝田吉重・森井外吉：肝外性発育を示した原発性肝癌の1例。日内会誌 **70**: 1302, 1981
- 12) 二村圭子・田内胤泰・遠山淳子・石川 勉・丹羽幸吉・伴野辰雄・水谷雅子・牧野直樹・三村三喜男・水谷弘和・鎌田憲子・石垣武男・今輩倍庸行：長期経過をたどったと考えられる有茎性肝癌の1例。日医放線会誌 **41**: 810, 1981
- 13) 堀江 裕・吉田 裕・今岡友紀・周防武昭・加藤誠一・平山千里：有茎性発育肝細胞癌の臨床的検討。肝臓 **22**: 1219, 1981
- 14) 荒川正博・鹿毛政義・磯村 正・川野芳朗・神代正道・中島敏郎・久保保彦：肝外に巨大な腫瘍を形成したいわゆる有茎性肝細胞癌7例の検討。肝臓 **23**: 1235, 1982
- 15) 中山宏幸・坪内博仁・有沢速雄・山下 亘・山口幸一・窪 修・橋本修治・川田卓郎・小野二六一・迫田晃郎：肝外発育型肝癌の1例。臨と研 **59**: 4046, 1982
- 16) Charnsangavej C, Chuang VP, Wallace S, Soo C and Bowers T: Angiographic classification of hepatic arterial collaterals. Radiology **144**: 485~494, 1982

(1983年8月12日受付)